前由分社發行

家庭雜誌

第六卷

第二號

明治四十二年五月一日發行

Dai 6 Kan.　KATEI ZASSHI　Dai 2 Go.

明治四十二年四月二日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

新綠……白柳秀湖……一
自由結婚論……若宮卯之助……三
家庭の母に薦むる期一書……中尾傘瀬……五
人生即藝術……吉田碧寥……七
小品二篇……尾前翠村……一〇
鉛の色のまぼろし……德永保之助……一一
保子さん……上司小劍……一三
小說 幼き日……守田有秋……一四
自由結婚の可否 加納子爵外十五氏……一六
お伽噺 新浦島……刀根壺水……二一
子供……山田旭南……二二
女髮結……堀保子……二三
柴田女史離婚問題……守田有秋……三一
女子の解放……田岡嶺雲……三二

家庭雜誌社
東京府下大久保仲百人町二百二十番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

現代第一の活動雜誌

實業之世界

毎月一回 壹週紀念號 五月一日發行 本號に限り定價廿二錢 郵税二錢

▼現代日本に於ける大富豪の解剖……社説

資本家も勞動者も共に大利益ある新發展地

十五名士の見たる澁澤男評論……十五名氏

余が失敗の回顧と樂天主義……鈴木久五郎

後藤伯の青天白日……井上角五郎

奇想天外より來れる社會改良法……福澤桃介

威力全世界を壓す可き廿年後の日本……大隈伯爵

野依秀一論……山路愛山

先輩青年の反目と國家の損害……新渡戸博士

國民的元氣修養法……戸水博士

清國に於ける英獨二強の帝國主義と日本……佐原篤介

青年の大氣焰（實業之世界先輩青年聯合演舌會にてなしたる五大學校學生）

▼現代青年と實業之世界社長野依秀一君……三宅博士

東京芝三島町 實業之世界社發行 振替貯金三四三三

家庭雜誌
第貳巻第貳號
明治四十二年五月一日

新緑

白柳秀湖

衣食に迫はれて私は三日東京へ泊つた。塵埃堆き編輯局に、輪轉機の耳を聾するやうな印刷所の校正室に、干潮に下水の音が雨のやうな木挽町の河岸に私はイルラショナルな勞働に身心を消耗し盡して、四日目に南郊の寓居に歸て來た。途々私は泌み〴〵勞働の羞耻を覺えた。私は初めて自然派の大家と謳はれる人々が、高い處から見下して冷嘲する安月給取の心になつて見た。私は初めて洋服を賦で支拂ふ腰辨黨の心持になつて見た。

家へ歸つて椽端に出た。黄昏である、新緑は野から軒に迫つて、薄い光に私の鼻先、手頸、兩足を美しい鬱金色に染めた。蛙の聲が何處からとなく聞えて來る。

噫、春はもう徂かんとして居る。

何時花が咲いて、何時花が散つたらう、出社の途次、何とも知らず、電車が頻りに混雜した事があつたやうだ。考へて見ると、あれが花の盛りであつたらうか。

噫春は將に徂かんとして居る。私の春は何時であつたらうか。今、悲しくも無い。嬉しくもない。爾うして此新緑が別に何の感興を惹くのでも無い。噫、春は將に徂かんとして居る。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自由結婚論

若宮卯之助

（一）自由結婚の意義は明白でないとの非難がある。柳澤伯爵、上司小劍、幸徳秋水などの意見が則ちそれで、一應は尤のやうに聞えもする。けれども一々論理でたゝみかけたら、天下何の處に理義明白の言葉がある。例へは大石君の「男女の自由なる結合」はだうだ。幸徳君の「男女の自由なる戀愛」とは何のことである。男女の結合なり、性交なり、同棲なりには、少くとも二人の合意を必要とする。二人の合意が其の度に於て同質、同量の自由で成立できると思ふは、思ふ者に無理がある。此の如きは理に於て必無のことである。余は戀愛の自由を信ずる者でない、對手の同意、第三者より觀れば、相互の同意を要する者に自由のある筈がない。余は同一の理由に於て結合の自由をも否定する、否、天地間一切の物に自由を否定する。結婚は自由によりて成る者でない。讓歩によつて維持される者

である。戀愛も、結合も、乃至は社會一切の事皆それである。殊に日本の如く、男の持物にあらねば、所詮は動のつかぬ女共が目の前にうろ／＼する社會に於ての戀愛自由の御説法は餘りに有難過ぎて、繪に書いた牡丹餅の感じがする。結婚は自由でない、讓歩である當事者相互の寛容に由りてのみ。其の目的が達せられる。余は妻持ち兒持ちの諸君に對しても此の明白の理を説くの必要あるを思うて私に嘆息する。けれども家庭雜誌記者の發題たる「自由結婚の可否」は此の種の視點より觀るものではなく、寧ろ裏より觀た「媒妁結婚の利弊」は如何といふ程のものに過ぎないのだ。少くとも常識と稱する意義不明のものの判斷ではさうである。

（二）寧ろ「自然」といふ語が問題である。自由結婚の文字に異議を提出された諸君も、此の語に不服はないやうである。「自由結婚は動物的なれば自然なるべし」といふのが金杉英五郎氏。「すべて自由なる人間の行動は自然だ」といふのが大石誠之助氏、「自由結婚は自

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然なる結婚なり」とは木下尚江氏、「自然なる結婚には相違ない」と斷定されたのが小川未明氏、所謂自由なる戀愛に因れる男女のかゝり合をば「無論極めて自然なることと存候」と事もなげに出られたのが幸德秋水氏結婚を以て不自然となされたのが上司小劍、田岡嶺雲の二氏、以上の諸君に「自然」「不自然」の差こそあれ、人間も亦自然の一部なれば、人類の思想、感情、意志、行動悉く自然であるといふ大眞理は、不幸にして何人も認めて居ない。短く言へば人と自然との本來無差別なる所以は無視されて居る。此の本來無差別なる人と自然とが、如何にして對峙するに至るかといへば、自然の一部なる人が、人以外の自然を己れの役に立てやうとするからである。即ち自然の一部が他の自然に對抗する關係が生ずるからである。大自然の裡に分化が行はれて來るからである。されば、人間の進步、人間社會の進步は、主として人對自然の關係で定るので「自然」を恐怖し、「自然」に注文し、「自然」に祈禱した時代の人類は野蠻未開であつたので、自然を征服し、自然を利用する時代の我等は文明開化と呼れて居る。語を換へていへば、進步は自然を齣ることの度によつて測定される。人智の巧を盡くすといふは、自然の不足を補ふことである。在りの儘の自然を修正して、自然の一部たる人の需要を滿たすことである、自然は完全でない缺點だらけである。此の缺點だらけ、此の不完全の自然を修補する者は人の技術である。理想である。自然の一部たる人の精神には、不完全の自然物を、つぎ合はして完全物を描き出す力がある。所謂理想は此の力の流露である。植物の葉、動物の面、一として完全の物はない。けれども自然學者は是に技巧を加へて比較的完全の物を産出する。親子の事、主從の事、貧富の事、夫婦の事、其の關係は缺點だらけである。此の缺點だらけの關係に對して、種々の「主義」を擔ぎ出して、比較的圓滿な物にしやうとするが、我等が現在の社會的努力である。短く言へば、社會の改革は自然的でなく、人爲的である。人間社會の改善進步は皆、人爲の標準に據るべきものである。此の視點より觀れば、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼の累々たる無學の文士が井戸端會議の『自然主義』に鐚半文の値打なきことが自らわかる。

（三）家庭雜誌記者の『自由結婚可否』の質問に、批評の火熨斗をあて、其の意義の皺を伸して、更に言ひ換ふれば、（一）當人同志相對づくの結婚は、媒妁結婚に勝る者なりや、（二）若し勝るとせば、今日、寧ろ之を奬勵すべきや、（三）此の種の結婚にも尙ほ何等かの規定を設くべきや、（四）因襲的道德は此の種の結婚を認むるや、といふことになる。けれども、繪に書いた牡丹餅的空想論、抽象論は、余に取りては一の禁物である媒妁結婚、相對づく結婚の是非をば、時、處、位の關係を離れて絕對的に斷定せんとする如きは、全く一種無益なる智力的游戲に過ぎないのだ、余は性癖に於ても　且つ修養に於ても、運動者でなくて觀察家である鼓吹者でなくて批評家である。余は此の態度を以て、媒妁結婚は今、猶ほ昨の如き權威を、我日本の社會に有するやを問ふのである。

（四）泰西文明の來訪により、我等の世界觀は全く一

變して、所謂聰明者流の腦髓の權衡がとれなくなつて來た。我等は如何なる事物に對しても、先づ其の存在の理由を聽かうとする。歷史的惰性の脚を留めて、一先づ之を誰何しやうとする。如何なる制度も、如何なる傳說も、如何なる慣習も、無難に我等が批評の關門を通過するは、已に容易ならぬこととなつて居る。賀すべきも、賀すべからざるも、我等は方に變化の渦中に漂うて居る。我等の散髮は我等が泰西文明に降參した證據である。我等の廂髮は我等が未練多き過去に投げつけた離緣狀である、八十餘州の津々浦々、今や石油を燃かざるの家あることなく、活字の印刷を見ざる者あることなし。今や我等の舊文明は新文明の襲擊に逢うて神妙にも殆ど無抵抗の態であるに、媒妁結婚のみが、今、猶ほ昨の如き權威を有すと思ふ者あらば、汝、愚なる者よ、汝若し米國新聞にも容易に見る能はざる程の大膽露骨の求婚廣告を讀む能はずば、汝の目は盲である。汝、若し少年男女が秘密の胸より洩れ出づる『情人』『愛人』『スヰートハート』の語を聞く能はずば、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

汝の耳は聾である。然らば媒妁結婚は何が故に勢力を失墜しつゝある乎。

(一)「家」の爲の結婚は、「人」の爲の結婚となつて來た。(二)義務となされて居た結婚は漸く權利となつて來た。(三)結婚の對する要求には心理的要素が大に加はつて來た。是と共に兩親の束縛、社會の批評は大に其の壓力を緩めて來た。「出來た者なら仕方がない」、「當人同志が好きなら任して置け」とは媒妁結婚の堤防に對する蟻の穴で、行く行く決潰するに至るは今より見え透いて居る。

西洋の結婚と日本の結婚との相違は、單に事件の發起が當事者に在るか、當事者以外に在るかに留るので結婚其物に對する束縛、制裁は略ぼ同一である。否、余が一已の觀察に據れば、或意義に於ては、今の日本の結婚は西洋の結婚よりも、尙は多量の自由を含むで居る。自由と否とは余の論點に關係はない。余は媒妁結婚の衰頽を觀察するのみである。事件をして行くべき處に行かしめよ。非媒妁結婚の制度一たび確定の事

實となならは、倫理道德は喜で「事後承諾」を與ふるに至るは言ふまでもない。理論は常に事件の御伴をする。これ歷史の進行である。

(前號「自由結婚は良き乎惡き乎」を參照すべし)

▲擇つた結婚披露文

辯護士山崎今朝彌君は二月十三日山形さい子女史と結婚せり其の披露通知の繪端書には次の如きフルッタ披露文あり。

舊山形さい、明治十九年度の奧州弘前產なりと雖も日本語を能くす、三十九年女子學院本科を終る、元來耶蘇なり、多辯頓狂にして少々ウス野呂の氣味あれど正直無邪氣貞淑にして惡心少なし、頗に美人に非ずして最初は何だか嫌の傾きありしが目下は至極結構なり、何一つ此れと云ふて出かす事は無けれど身體强壯にして能く食す。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭の母に薦むる斯一書

中尾織瀬

昔の教へ子から、屡々『先生何ういふ雜誌を見たら可いでしやう』と云ふ優しい問を受くる毎に、困つたのは、これと指して購讀を勸める雜誌がなかつたことです。然るに幸に家庭雜誌が復興されて、此難澁な位置を扶けられたことは、萬謝に剩る次第さ、私共舊緣ある者の、特に喜び禁ずる能はざる所であります。

で、それに因みて、家庭の母に薦むる唯一書を紹介致さうと思ひます。

近來婦人を顧客とする書籍も續々出來まして、新聞の廣告や、單に表題だけを見れば、如何にも引着的な五十錢や一圓の金は惜しまず擲つて、直ぐにも買ひたくなるやうなものがありますが、實際は三文の値打もないものが多いので——徒らに現代に合はぬ舊思想を列ねたものや、讀んで實のない誰も知つて居りさうなことを書いたものや、平々凡々讀むにも足ぬものや、それは〳〵婦人相手の書籍ほどつまらぬものはありません。

それで私が茲に御薦めする書物は、そんなものを御讀みなさらずとも可いと云ふ憤慨心から考へ撰んだもので、書は古いが書てあることは、いつも新しい——恰も『眞理は古いが、いつも新しい』と云ふ如く、いつも生命のある感じのするもので、唯此一書をさへ讀めば、當今の三文書籍は唯の一冊も讀まずして可い、耻づかしいこともない、又時勢に遲れることもない、と云ふ私が確信とアドレーションと大胆とを以て、高調に御勸めする。

ルーソーの『エミール』

と云ふ書物です。之は彼の有名な、佛國革命の原動力ともなつたと稱せらるゝ『民約篇』の著者ルーソーの、同じ精神氣魄を以て、エミールと云ふ稚兒の發達に托して、其養育教育から觀察注意意見等を、極めて意義深く、痛烈に、眞率に書いたもので、實に一讀再讀三讀イヤ何遍讀んでも必ず讀み應へのする、婦人諸君が育兒上、兒童觀察上、心理上、思想上、充分親んでよ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

き、是非にも親まざるべからざる確な價値ある書物と信ずるのであります。

原文は佛文ですが、獨譯も、英譯、將日本譯もあります。日本譯は東京開發社出版を覺えて居ます。何卒婦人諸君が此書を御讀みになつて、益々自啓したまはむことを只管に望みます。

實は私自身が此書に依つて、多く精神上思想上の利益を享け、且つ大に誘導啓發せられたことがありますから、之を御薦め申すのであります。私の過去、家庭雜誌其他にて公表したる育兒觀なども、根抵はルーソーに負ふ所あり、「エミール」に養はれた所あるを、韞まず白狀して置きます。

附記　堺君が其「家庭の新風味」を書かれる時に、福澤翁の著書が大に資けとなつたと聞くのは、一寸意外の心持もしますが、眼光紙背に徹するの鑑識があれば、どんな書でも他山の石となる。一体書と云ふものは鵜呑丸呑するものでない「エミール」さても、それだけの用意は要る。

人生即藝術

吉田碧寥

人生なくして藝術がない如く、藝術なくして人生はない。

藝術が他の諸學藝と同樣に、人生と極めて密接なる關係を有しながら、猶人生とは離れたる一領地であるとなした見方から、藝術は全體としての人生の一部であると云ふ見方に進んだ。而も新時代の人心は此見方に滿足が出來ない。吾等は人生即藝術の意義を明かにしたい。

藝術と人生と相離れたるものと見ると、それ自らの人生が即ち藝術であると見ると、其處に大なる心持の差がある。吾等は人生に對して眞面目である。利害の感以外に生に對する眞摯なる執着がある。此感情が常に吾等を動かす、而も藝術に於て此感情は常に現はれて居る。

人生とは事件の起滅擾亂ではない、人類の生滅離合

でもない。人生とは人間本性の發現して想觸れ相離るゝ、其の複雜なる往來の事實である。事件を見ず、人格を見る。吾等は演劇的脚色に泣かずして、人間の極みなき憂愁のために泣く。敵國の保塞を奪ふた大決戰に必を動かさずして、本性の自由のために舊き壓迫に抗する勇ましき戰に心勇む。人生は人にある。人生の意義を要めんとして哲學に行く人がある。されど人を解せずして哲學は何等の答案を與へないのだ。我自らの存在を意識して後哲學に究極の合理を求むべきだ。

金屬の相打つ處に火を發する。人と人の相觸るゝ處に情緒の火花を發する現實生活の事實は切實である深刻である。而も人格の發現であるが故に吾等は其價値を疑はぬ。此價値生活の色彩は豐富で而も興味多きものである。茲に興味とは意識的に發するものゝみでなく、人自らが我な

らぬものに我自らを合化し得たる瞬間の心的狀態を云ふものである。人は善惡美醜愛憎に對して何等かの興味を有する、而して此心持の根底には必ずや他物を受納して我心を動かすべき機能を有して居る。此動かすものと動かされたる我と、こは藝術の最後の要素ではあるまいか。

されど人生はあまりに我に對して利害の關係が多い。たとへば演劇を見るが如き利害と沒交渉の幻想の境地はない、醉盡して我なき世界に入るが如き興樂は得られない。人生の事實は切實であるが故に常に荒敗なる興味に終り易い。自我は常に醒め勝ちである。此悲しき破綻は藝術に於て補はれやうか。

人生に觸るゝ藝術と人は云ふ、こは何を意味するのだらう。若し人生に於て破られたる吾等の興味を藝術に於て要めやうとせば、人生に觸るゝ事少なき藝術に、沒入したい。藝術も亦荒頽せる人生の俤を追ふて喜ぶ

母なるが枕經よむかたはらのちひさき足をうつくしと見き（晶子）

のであらうか。

デカダレの文藝は此荒頽せる人生を畫いて居る。近代文藝の特色は醒めたる人生の冷たき興味を現はして居る。されど人が此の文藝に接する氣持と實際生活に接する氣持とに何等かの差別を見やうとして居る。人生に觸れ乍ら、猶人生と一歩の差、一線の距りを保たうとして居る。藝術本來の性質は此の如きものであらうか。

藝術の根本要素は人でなければならぬ。即ち實際生活そのものでなければならぬ。然るに藝術を利害の關係なき我ならぬ事象として觀賞せんとする此立場は未だ藝術の根本義に徹せぬものである。若し藝術の外に人生ありとせば、藝術の中に取入れられたる人生と、實際生活とは其質に於て全然異るものでなければならぬ。而も藝術はその內容を實際生活の內容と一致せしめやうと努めて居るのだ。予盾が起らざるを得ない。

藝術の生命は人間生活の脉膊と皷動を同ふして居る其處に藝術の意義がある。若し別個の心臟に生きんとせばそは藝術の敗滅である。生きたる人は實際生活に於て、將た又藝術に於て何等の差別がない、されば人間の呼吸を究極の要素とする人生と藝術と其の根抵に於て何等の差がない。

人生即藝術、藝術即人生の根本義に立つて吾等は近代生活の呼吸をやりたいのである。（四月十九日）

西洋に傳へられた日本の母親の教訓

偶舊い『ハーパース、ヰークリー』を引き出してみると、日本の婦が嫁入する時に、母親から言つて聽かされる個條と云ふものが載つてゐる。一寸面白く感じたので、玆に飜譯して御目に掛ける。圏點は小生の小ざくれと思召せ。（余瀬生）

一、常に姑舅に可愛がられるやうにせよ。
二、餘んまり多く饒舌るな。
三、早く起き、晏く寢れ、决して午睡するな。
四、五十歳になるまで、人寄せに交じるな。
五、八卦見に相談するな。
六、美しい着物を着るな。
七、謙遜であれ、禮儀正しくあれ。
八、嫉妬するな。
九、良人が無理でも怒るな。
十、隣の人の悪口を言ふな。
十一、良人に對して強き柔順は妻たるもの、最も貴き品性である。

小品二篇

尾前翠村

彼

彼は夕暮の町を歩るいて行つた。ぞろぞろ行く人は皆怡々として晴れやかの姿をして居つた。花に浮いた春の町と春の心――彼は唯一人破れた心を抱いた。

若うして人に反き世に反き、生存といふ運命に操られて吾と吾身を現實の苦きに投じ、やみ難き吾なる影に引かれて、廿餘年の生活は反抗と憂愁との歴史であつた到る處に於ける彼が生存の運命は常に、劣敗の苦しい經驗であつた。何に俺は俺だ俺一人立つ時が最も强いのだ――此の誇は彼が青春を通じて常に彼を悲慘なる運命に導いた

今日も亦たそれはあつた。冷かなる衆目の侮蔑に對する憤怒、憤怒に次ぐ反抗――『おゝそれが何だ』と叫んだ言葉はやがて、忽ちに居つてやるものかの行爲

となつたのだ。

彼はとぼ／＼と歩るいた歩るいた、而して晴れやかなる人々の姿を見た時、突如として自己を憫む心が起つた。……俺の居る世界とは違ふのだ俺は何故あの樣な晴々しい心になれないのだらう噫！永久に暗のは俺の心だ

彼は聲を立て／＼泣きたいと思つた願はくば此の大都會の生活を呪はしめよと思つた。呪つてさうして、總ての人に向つて復讐せしめよと思つた。

彼は唯とぼ／＼と歩るいた。花に浮いた人々の晴れやかな姿は、柔かな春の夕陽を受けて燦と映えた。

夜

ひよろ／＼立つ海岸の松の並木の中に二條の鐵道が冷たく蜒々と續いておつた。どう／＼聞ゆる海鳴の音は風の絕間／＼に物凄く地に響いてくる、しぶく雨は夜の中にしめやかに灑いで、松の梢の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

音が、闇から闇に呻りの樣に聞えた。
自分は其の並木の中に立つて鐵道に沿うて歩んで居つた。ふと後の方から、轟々と列車が走つて來た。眞暗なしめやかな四邊の空氣は一しきり物凄い響を立てゝ震うた。冷たい風が颯と自分の邊を吹いた。夜は暗い列車は黒い――突如として自分は物は襲はれた樣な氣がした。
列車は轟々と走り去つた。其の音が次第に遠ざかつて行つた。四邊は元の嵐と海鳴との闇に復つた。自分は暫時列車の方を視凝めた儘茫と立つて居つた。

▲次號の讀物

家庭破壞論　（大石祿亭）
散文時代　（中島孤島）
夫婦の優勝劣敗　（青柳有美）

保子さん

上司小劍

保子さん、お互ひに變りましたね、私があなたに初めてお目にかゝつたのは、何んでも今から十年あまり前、二十一二三の頃だつたと思ひます、其の頃あなたは十七八の妙齡で、芝公園辨天池の前の堺君の家へ來てゐましたね――家賃三圓の――
丁ど盆の十六日で、閻魔の開帳があつて、芝公園は賑かでした、早熟の少年は二十二三にもなれば、一人前の思想と智識とを有つものですが、私の二十二三はカラ子供でした、人の顏を見ると只恥かしかつたものです。それも其の筈です、私は二十歳ぐらゐの時に、家で汽車や太皷の手遊品を持つて遊んでゐたのですもの――噓ぢやありませんよ。
それですから初めてあなたに會つた時にも、恥しくて顏を見ることも出來ませんでした。だから其の時にあなたがどんな美人だつたか少しも知りませんでした

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

よ。其の後堺君が白金に移つた時、私が隣の家にゐてあなたとも度々お目にかゝつて、懇意にしましたね。今でも覺えてゐますよ、あなたが離座敷で寢坊をしてゐるのを私が起しに行つたことがありましたね。ポチと云ふ痩せ犬がゐて、能く吠えましたね。アミダ籤を引いて梨を買ひにやられた、こともありましたね、其の頃は亡くなつたあなたの姉さんも健康で、秋になると庭の柿の實を取つて喫べてゐましたね私は子供〳〵してゐたのでよく堺君に叱られたり、使にやられたりしましたね今時の諸秀才は皆早熟の大家ばかりですから、二十二三にもなつて、使歩きをさせられるやうなものは滅多にありますまい。

保子さん、昔のことを考へると夢のやうですね。そ

れも滑稽と悲慘との夢ばかりで、面白い夢は一つもありません。私は常に私の周圍に滑稽と悲慘とが堆くなつてゐるのを見て、人生と云ふものは總べて滑稽と悲慘との二要素から出來てゐるのでは無いかと思ひます前の家庭雜誌にもいろ〳〵のことを書きましたね。他の人の文章は皆立派なものでしらうが、私が書いたものは今から思ふと詰まらない馬鹿〳〵しいものばかりで可笑しく思ひます。あの時にはあれで內々得意だつたのだから、滑稽ぢやありませんか、尤も今から二三年も經つて、まだ生命が續いてゐたら、私がまた顧みて今の私を笑ふやうになつてゐるでせう。

保子さん、私が文章を書くのは、古風な、感興とか云ふもので書くのでも無ければ、道樂で書くのでも無

く第一流の文章家と呼ばれたいと云ふやうな下らない名譽心の爲めに書くのでも無く、全く生活の爲めに書くのです。百姓の作る米が粒々辛苦なら、私の書く文章は字々血液です。其の血液を無代であなたに差し上げるは、昔馴染の友情とでも云ふものでせうか。

保子さん、回顧すれば我々の過去の生活にはタイした面白いこともありませんでしたね。これから先きの生活にもドウセ面白いことはありますまい。我々の一生は斯の如くにして、麥酒の泡の如くに消るのでせう

一寸珍なもの
コーンフロワー製の新滋養食

皆樣が西洋食料品店などで、コーンフロワーを御求めなさると其袋にいろ／＼コーンフロワーで拵へる菓子の種類が書いてあるのを御覧でしやうが、之は其處にも無い私の家庭で發明した新意匠の菓子！即ちコーンフロワーを水で練つて、團子の形になりロツフルの形になり、適宜に形造つて、別に沸き立てた湯の中に落としてしばし煮るのですさうすると丁度葛餅のやうなものが出來るそれを掬ひ揚げて豆粉を塗して皿に盛る。（豆粉には砂糖が入るのですよ。）子供は喜んで喰べる。病人には持つて來いの消化輕易の滋養食。勿論無病健全の大人がきこしめて一寸珍なもの！（余瀬生）

小説 幼き日

守田有秋

父の入獄後、母は家財を賣り拂つて市外の江の口村と云ふに移つた、而て此處から紺屋へ手傳に行つて居た私は今も思ひ出す、母の其時の風采と云つたら、乞食と何の劣る處も無い程であつた。身に着けた着物は、破れた個所を縫ふ事すら出來ぬ迄に襤褸に成て居たので其處此處が糸で縛つて止めてあつた。寢るにも、起るにも唯だ一枚、母は其れより外に持なかつた。

けれども、母は矢張女である。其の痩せ窶れた五體にも、尚恥さを知る女の血は通つて居た。母は乞食にも劣つた其の風采を人に見らるゝのを厭ふて、朝は未明に起て紺屋に通ふ、夜は暗に紛れて家に歸つた。

其の頃は物價の安い時であつたから、先方で食て、僅に五錢の賃錢であつたが、如何に物價が安いと云つても一日五錢の金を以て、何して二人の兒を養ふ事が出來やう、姉も私も、常に飢て居た。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

節分の夜は、何處の家でも盛な豆撒を遣る、豆は庭にも戸外にも諸方に落て居る。私は節分の翌朝、地に落て居る此の豆を拾つて食た事がある。然し私は少も其を耻と仕なかつた、私は是を當然の事の様に思つて居た。

長屋の外に乾物屋がある。其處の店には何時も吊し柿が吊してあつた、私は能く其を盜つて食つた、初手の中は内密盜んだが、後に成ては公然に、

『小母さん、是遣はさい』

と、言ふなり、矢庭に取つて口に押込んだものだ。恁樣事を數へたてると、數限りはないが、私は其を決して惡いとも、耻づ可き事とも思つて居無つたのだ。

私は活く可き當然の權利を持て居た。『腹が減ても飢うない』と云ふのは、武士の家庭に敎へられた道德で、私共、自然な、野生の平民の子には、其樣立派な行爲を

爲ようと言つたつて、迚も出來る譯はない。私は自然に放任された自然の兒であるから、自然の性の儘に行動つたのであるけれども、流石に姉は、私の此の行を見て、許しては置なかつた、何時も狂氣のやうに成て、私を家に引摺て行つては、嚴しい折檻を加へたものだ。

『晋、お前は、まあ人樣の物を盜てまで食度いかえ、一体何うして其樣卑しい氣を起しました。斯樣事が母さんにでも知れて御覧なさい、留守をして居る姉さんが何と言つて母さんに申譯を仕ます!』

恁う言つて姉は、嫌と云ふ程私を捻る、私は其でも許して呉とは 何しても言はぬ、姉は、『是でも爲るか、是でも止ぬか』と言つて、私が泣いて謝る迄捻る、私の股には何時も紫の痕が絶え無つた。

恁樣に姉に叱られるので、私は一時盜人の眞似は止めたが其の代り腹の減る度に母の通つて居る紺屋へ行く

事にした、其れは、行く度に、母が何かしら必と私に與れるからである。

然し、母は、私の行く度に、人前では、「仕事の邪魔に成から、來るんぢやないよ」と言つて追返す。時偶人の見て居ない事があれば、母は密と私を納屋に隱して置いて、握飯や、澤庵漬を持て來て與れる私は其を默つて食て、默つて歸る。

斯樣事は、幾度もあつた。

けれども、其が何時迄續くであらう、遂には紺屋の主婦が食事時に、帳場にちんと座つて、遠くから、母の食事を見張るやうに成た。

爾うとは知らぬ私は、或日、非常な空腹の餘り、例の通り母を尋ねて行くと、母は大變私を叱つて追返した叱れても、追返されても、私の空腹は決して癒る譯はない、歸り道に、私は或魚屋の店でちく輪を一本盜んで、其を生の儘に食つて、後で激しい吐瀉を催はした事がある。

斯樣淺ましい生活を仕て迄も、人は尚は其の生活慾を

滿足させない譯に行かぬのであらうか今考へると私は堪え得られぬ感に打たれる。(了)

鉛の色のまぼろし

(新しき歌古き歌とりまぜて)

德永保之助

鬱憂の鉛の色のまぼろしよわがたましいの 泣き濡るゝ姿よ

大天を見よ照りまさる日は狂た燃え墜ちんとす早ものがれよ

またのぞくあな又もまたおそろしき眼はのぞく獄舍のわれを

ものみなはもの憂くむなし靈のうつろは戀のゆめもはらます

いだかむとする一一刹那戀人の手よりのがれし少女を追よわれど

わがこゝろ滿たすをんなの幾人のこゝろの中をさまよひ呪ふ

蒼天よやぶれよ暗くなれよ落ちよわれは汝のかゞやくなまへ

こゝろみに戀ふと詐りし一君は誘惑せられたりと知りたまへ

心君に何時しかはぐれ知らぬ間に知らぬ處に我は來りぬ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自由結婚の可否

思想界の動揺は今や有ゆる階級を震撼せり。彼の舊きものと、彼の權威ありしもの。皆な時代の大勢に抗し得ずして亡び去らんとす。自由結婚可否の問題は、偶以て新舊思想の干格背馳する所以の道程を示すに足らんか。吾等感ずる處あり、下記四項の質問書を名士十數家に提出して以下列記するが如き應答を得たり。

質問四項

（一）、自由結婚は、自然なる結婚なる乎

（二）、自由結婚は、現在の道德律に律せらる可きもの乎。

（三）、自由結婚は、奬勵す可きものか、排斥す可きもの乎。

（四）、自由結婚は、範圍を制限するの必要ありや。

（以下右に對する諸家の應答を到着順に列記す）

前號應答の諸家

與謝野寛　後藤宙外　木下尚江　幸德秋水　金杉博士　相馬御風　上司小劍　白柳秀湖

柳澤伯　大石ドクトル　加藤ドクトル　曾我子　岩倉子　小川未明　田岡嶺雲

「一」 嶋崎藤村氏

拜啓　自由結婚は、眞に新しき生活を營まんとする精神と努力とありて、はじめて意味あることに、思はれ候——例へばツルゲネエフの作に見るごとき青年男女の誠意ありて、生は自由結婚そのものよりも結婚する人々に重きを置くものに候。

「二」 秋元春朝氏(子爵嗣子)

拜啓先般御問合有之候　自由結婚問題に付きハイカラ青書生の愚考御返事申上候　尚貴社發行家庭雜誌の餘白を塞ぐ事を得ば幸甚に存候

扨て自由結婚とは何を指すや　小生の愚考致處は先づ現時の俗習を大畧二種に分つときは

一、求婚者相互(一夫一婦)の將來の利害を基礎として結婚を爲す者

二、第三者の將來利害得失を基礎として結婚を爲す者

而して右二種の内一方を主として他を幾分參酌せし者及び二者平等に參酌せる者尤も多く普通に行はる結婚と存じ候

第一種の者は乃ち本人の自由意志にて撰定せし者なれば將來の幸福責任は勿論本人にある可く

第二種者は乃ち兩親の意志、親族關係、家系血統其他の事情に依り撰定せし者にて從つて其責任も第三者に重し

以上の前提より小生は第一種を以て自由結婚の解釋となす者なり

依て貴社の第一問題に對しては智識自重心の發達程度如何に依れども勿論自然ある者にて他は悉く不自然なるものなり

第二の問題に對しては公德私德習慣の程度如何に依れども要するに律せらる可き者に非ず

第三の問題に對しては大に奬勵すべき者にて獨立自重心を養成する上に最も必要と認む

第四の問題に對しては範圍を定むる必要を更らに認め不申候

「三」 子爵　加納久宜氏

多忙の爲め貴答延引御恕し可被下候則左に

(一)自由結婚は自然なる結婚なり　然れ共自由の中に人爲的裝飾を加へざれば獸類的結婚となるべし

(二)故に放恣を意味せる自由結婚は道德律に律せらるべきは當然なり

(三)自由結婚は奬勵すべきものにもあらず又制抑すべきものにあらず

但し本項に謂ふ自由結婚とは人爲を加へざる自由を意味す

(四)自由結婚は無論範圍の制限を要す所謂人爲的裝飾なり

之を要するに人類の自由結婚と獸類の夫とは意義に於て大ひに異なる處あり人類の結婚は人爲の裝飾即ち人道的制限中より自由の行動を取りて妨げなき限りを放任すと云ふの主義なり

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「四」子爵 松平賴平氏

（一）自由結婚は言ふ迄もなく自然のものなるもチヨン髷の未だ生存せる現下我國にては不自然といふの外なかるべし
（二）自由結婚の道德律に律せらるべきは其人格により時代道德の變遷に伴ふものあるべし
（三）我國民が女尊男卑となれる時代に於て自由結婚は奬勵さるべし
（四）現代の道德上よりせば我國民は自由結婚の範圍を制限するを急なるべし

「五」子爵 勘解由小路資承氏

一言せば此問題は當人の人格により定まるものと存候若當人にして理想的の人物ならば自然のものにして現代の道德律を超絕し範圍の制限は不必要と存じ候只しかしかゝる人に對しては奬勵すべき必要も排斥すべき必要も有之と存じ候。當人が賤しく候はゞ自由結婚が自然なるとも排斥すべきものと存候若し當人が普通の人ならば現代の社會に於ては寧しろ自由結婚は不自然にして現在の道德律によつて律せらるべきものとすされど特別に排斥すべきものとは存し申さずたゞ時と場合と相手によつて制限すべきものと存候 但し愛を以て制限すべきものと存候 答は甚だ平凡に候へども一班としては之以上のお答は申上かね候

「六」片上天弦氏

拜復當事者等自から始終の全責任を負ひ得る場合、少なくとも全責任を負ふだけの覺悟十分なる場合に於いて、自由結婚は初めて成立し且つ又是認せらるゝものと存じ候 草々

「七」文學士木山熊次郎氏

拜呈結婚問題に就ては別に何等の意見なき小生、殊に自由結婚者に多數の知己も無之小生の愚見はお答へ致すとも何のお役に立つべしとも存じ不申候。然し折角の御下命に御座候へば思ひ出し候まゝを申述ぶれば
（一）自由結婚の成立が、夫婦兩者に於て、一時の魔風に侵されたるにあらずして、十分なる判斷思慮の結果に出たらば自然なる結婚と申す可く候はんか、尙此判斷思慮の中には、此結婚が一家親族に對しても、最も合理的なることを入れ置度候
（二）我日本の現在の道德律は何なりや。其道德律の認識に就て他と見解を異にする小生は我國の道德律の說明から取かゝらざる可からず候故。一寸簡單にお答致しかね申し候、此まで面倒になさず常識にて、直言すれば、現在の道德律に律せらるゝを可とする場合多く、可とせざる場合比較的少なしと申上度候
（三）自由結婚を奬勵して可なるの日の來らんことを望み申し候へども現今に於ては、尙早し。之を奬勵して弊の來る方多しと存じ候
（四）現在我國の事實問題としては、前說の次第にて範圍の制限を要

すと存じ候
右不取敢貴答のみ、愚見御笑殺奉願上候　不盡

『八』　昇曙夢氏

貴問に答ふ

（一）自然なり
（二）自由結婚も人間の道德的活動の一ッであるから無論道德律に律せらるべきものだが、併しそれも道德律に依りけりで、現在我邦で行はれて居るやうな低度の道德律とは或は相容れないかも知れない、
（三）奨勵すべきものなり
（四）一夫一婦でさへあれば別に制限を要せず

『九』　江見水蔭氏

有秋君！　もすこし氣の利いた問題にお答へするの光榮を與へて下さい

『十』　小山内薫氏

（一）（二）（三）（四）右四問に對し小生はイプセンの脚本『ロスメルスホルム』一篇を以て答と致し候。小生の答は他にこれなく候。

『十一』　伯爵　宗重望氏

一、自然なる結婚なるには相違なし
二、日本の道德律に律せらるべきは無論の事なり。
三、強いて排すべきにあらず、さりとて奨勵するにも及ばぬ事なり。
四、社會智識の幼稚なるものにはなさしめざるが可なり

『十二』　森近運平氏

（一）自由結婚は固より自然なるものと存候。物皆な自然の本性に從ふ、之を自由と申候。されば御質問は、自然の狀態に於ては『結婚は自由なるか』と言ふも同樣、極めて明白の事と存じ候但し結婚と云ふ字を善意に解しての愚見に候。
（二）現代の道德と『自由』とは正に相反するものと存じ候。所謂道德を以て干渉するか故に不自由に候。
（三）奨勵や排斥はする人の自由に候。何れにても『べき』がついては不自由に相成候
（四）制限などはマッ平御免に候。但し男女とも成年に達する迄には斯道の智識を與へる樣に致したきものに有之候。

『十三』　中島孤島氏

四問共『自由結婚』の意義を定むるが先決問題なるべし、假にこれを『戀愛本位の結婚』の義とすれば

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（一）固より自然なり

（二）現在の道德律にも抵觸する所なしと思ふ

（三）自然なるが故に必しも奬勵すべからざるは猶ほ自然主義の必しも奬勵すべからざるが如し、要は人々の地位境遇による自由は許すべきも強ゆべきものにあらず、

（四）從つて之の實行の範圍に自ら制限さるゝことゝなるべし

『十四』　巖谷小波氏

自由結婚に付て意見を云へとの御注文ですが。左様、無論理想としては、私も自由結婚を賛成するものです。然し理想と云ふものは、兎角實社會に容れられません。況んや結婚なるものが、一種の方便であり儀式である現代では、所詮理想の結婚は、まづ行はれ難いものと觀念せねばなりますまい。

否、實に私は、結婚が已に方便であり、儀式である以上、むしろ不自由結婚の方が幸福の度が多いのではあるまいかと思ひます。

『十五』　青柳有美氏

自由結婚とは男女相互の自由撰擇により夫婦となり帝國民法に所謂共同生活を營む條件を具備するものと解して左に愚見を陳す

（一）自由結婚は自然なり。されど野蠻趣味のものにして文明の趨向に合せず、蓋し文明とは自然を離るゝにあれば也。而して自由結婚

のチャムピオンは差し當り犬畜生なり。

（二）現行の道德律も國により人種によりて異なるものあり。故に自由結婚の可否曲直は國と人種とのコンモン、センスによりて批判せらるべきもの也。

（三）文明社會は自由結婚を排斥すべきものにて刀劍の鑑定は之を鑑定家に依賴すべき如く夫妻の撰擇は既婚の老人に依賴すべき者也

（四）枯木も山の賑にて野蠻趣味は文明に異彩ある感興を與ふるもの故文明の今日にも時折は自由結婚も行はるゝがよし。

『十六』　吉江孤雁氏

（一）自由結婚といふ事の意義如何によるでせうが、今日に於て絶對の不自由結婚即ち全然命令的壓迫的の結婚のあらうとは思へない、昔時に比しては今日は餘程自由な結婚が許るされてあると言つてさしつかえないと思ふのです、自然不自然といふならば、自由なるだけ其れだけ無論自然でしせう。

（二）結婚あるものが既に社會上の事實である以上は勿論、是非の承認は別として、現存道德に律せらるべきものでしやう。

（三）奬勵すべきものでも排すべきものでもないでしやう。

（四）實行すべき範圍といふ事はなかなかむつかしい問題でしせう。要するに各個人の自意識の問題です、範圍は外界的に定め得らるべき者でない要するに制限の附らるゝ性質の者ではないと思ふのです

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

お伽噺

新浦島

刀根壺水

ある處に花ちやんと云ふ子がありました。生れ附いて綺麗で、其上心立の良い子でしたから、誰も褒めないものはありませんでした。

花ちやんには澤山の兄弟がありまして、お家で遊ぶ時には、皆一緒に種々事をして仲よく遊んで居たのですが、或時花ちやんは、風の神様に誘はれて阿母さんや、兄さんや、姉さん達に別れて遠い遠い國に出かけました。

此の風の神様と云ふのは、初めは花ちやんの處に來て、優しい聲で密と耳打ちをして、

「花ちやん、花ちやん、此からずつと遠くに行くと、卯の花の國だの、躑躅の國だのと云ふ、綺麗な人許りの澤山居る處があるから、其處に行て見ないかねえ」

と、云ひますので、最初は然う行きたいと思はなかつた花ちやんも、後には、兄さんや、阿母さんなどの事は忘れて

「では行つて見ませう」と、進んで行く様になつたのです。

一体此の卯の花の國と云ふのは、白や、青や、黄色花などが咲いて居て、年中蝶や蜂などが來て、面白い舞蹈りを躍つて居る處で、花ちやんは、風の神様に連れられて、此國の花園の中をあちら、こちら歩いて、蜂や、蝶のお友達と面白、可笑遊びました。

其内に日がぽつとり暮れて、雨さへさら〳〵と降つて來るものですから、花ちやんは恐い恐いと云ひますと、風の神様は、初めの様な優しい言葉はかけず、大變に憤り出して突然、花ちやんの襟首を摑むと

「何を其麼に泣くんだ」と云い様、空に高く抛り上げました。

すると花ちやんの體は宙をぐる〳〵と廻つて、或木の下に落ちたのです、見ると其處は花ちやんの家の前なのでから。

「阿母さん、兄さん、姉さん」と、花ちやんは聲を立

て丶泣き出しましたが、誰も返事をするものがありません。

暫すると、誰か知らないが、汚ない汚ない砂まびれになつたお婆さんが來て

「もし〱、其處に居るのは花ちやんではありませんか」と云ひますから

「全體貴女は誰方です」と、聞きますと、お婆さんは不思議な顔をして

「花ちやん、もうお忘れなのか、私はお前の妹だよ」との事に、花ちやんは、熟々と其人を見ますと、成程然う云へば何處か妹の樣です。けれども何うして其妹が這麼になつたのか不思議でなりませんから、其譯を訪ねました。

處が、其時は花ちやんが、此家を出てから、もう三十年も經つた後の事で、花ちやんの阿父さんや阿母さんや、姉さんなどはもう、遠くの昔しに居なくなつて一番末の妹でさへ恁う云ふお婆さんになつて居る位なのだ相です。

其を聞いた花ちやんは、阿母さん、阿父さんが急に戀しくなつてどうかして一度會いたい、會いたいと、と云つて泣き出しますと、風の神樣は何處で其聲を聞き付けたか

「え丶、喧ましい、乃公は其樣聲が嫌だ」と、今度は前よりも又荒々しく花ちやんをも、花ちやんの妹をも一緒に、暗い暗い溝の中に吹き込みましたので、綺麗な花ちやんの體も、何時の間にか汚ない汚ない泥にまびれて了いました。（をはり）

女學校案内

戸板裁縫女學校

▲場所　東京芝區三田四國町
▲年限　前期三ケ月後期三ケ月
▲學課　裁縫の外、禮式、茶の湯、挿花、國語、割烹、造花、刺繍、洋服裁縫等を隨意に學び得、
▲校長　戸板せき子、　生徒　目下三百餘名
▲月謝　一圓五十錢、束脩一圓

女髪結

保子

三月の下旬某夫人から轉居の御通知がありました、其末に『しばらくこゝに腰を落ちつけるつもりです此度は奇抜な職業を初めますよ』といふ事が書き添へてありました、洒脱の性質を具へて常に勇氣に富んでゐる御當人が自ら奇抜と被仰るからには、どんな事だと思ふて、種々想像してみたが思ひ當りません。兎に角く早く其奇抜の正體を知りたいと思つて居りましたが私は當時雜誌再刊の準備や何かで、毎日〳〵かけ廻つて居りましたので、つひ御會ひする機會もありませんでした、漸く四月三日に雜誌の發送をすましました、今日こそはと樂しんで夫人の轉居先さへ參りましたけれど幾度尋ねても判りません、不思議に思つて近所に住んでおいでの令弟さんの家を尋ねて令姉さんは何な職業を御初めなさつたのですと伺ひましたが、笑つていらしつてお語しなさらない。

『丁度今姉の處へ行てうと思つていた處ですから御案内しませう』と被仰るので、御供しました、私は道々何んだろうと、小々實の處氣味惡るく思つて、令弟さんの後へ付つて參りました、すると小さな、サツパリとした家の門に『女髪結』と書ひてある看板を指して、『此れですよ』と被仰るので、さすがの私もあまりに奇抜過ぎたのに吃驚しました、で内を窺いて『御免下さい』と聲をかけると、『ハイ』と元氣な聲で出で來らしたのが、白前掛の甲斐〳〵しい夫人『まあ保子さんですか、今日は女の方の聲を聞くと何だか怖くつて慄へ上るやうですよ、今も貴方の聲でこんなに手足が慄へている』と仰る御當人も慄へてゐるか知りませんが門口で先づ奇抜に驚かされた私は、挨拶なぞは其方退けで、何日の間にこんな事をお覺へになつたのです、と申しますと、『私は平生人の髪を結ふのが大好きで、よく妹の髪など結ひました、それに何をしたつて思はしい事もないから、思ひ切つてこんな事を初めたのです、これでも少しは稽古をしましたよ、實はね、昨日から看板を出したのですけれど考へると恐ろしくつて

昨日はとう〳〵逃げだして家を空虚にしていたのですが今日は朝起きたばかりの處へ、一人の娘さんが來で後程來るから一つお賴みしますと、約束して歸りました。承知はしたもの丶モウ手足が慄へ出して胸まで動悸つくぢやありませんか、すると三十分ばかり經つて其娘さんが來る、度胸は定めたもの丶まだ何んだか耻かしくつて逃げだしたくなる、實は私は今日初めての髮結でお氣に入るやうには出來ませんと言ひますと、ナーニ一晩寢れば直ぐこわれるのですから何んでも搆はないと被仰るので、取かゝつたもの丶手足位ひならまだしも今度は躰中が慄へて本當に夢中で結ひ上げました、代價は何程といわれて、いくらでもようムいます、三錢も頂きませうと申しますと、今時そんな廉い髮結さんはないといつて、五錢置いて歸つたの、間もなく第二のお客が參りました、二度目でもあるから前程でもありませんでしたがこれも半分は夢中で結ひました、三度目の時には、保子さん、自分ながら本當に能く出來たと思ひました」との事でした、島田でも結

へますかと尋ねましたら、今日のは「銀杏返し」だから可かつたがそんなのが來ると少し困りますねと眞面目に被仰るので、心細ひ髮結さんですと大笑ひをしました、私は夫人が相變らずの勇氣に富んで入つしやるのに感服すると同時に、何んとも言れぬ一種の悲哀を感じました、社會人生の爲めとは言ひながら、良人は牢獄に繫がれて、跡は女の手一つに良人の形見の幼兒を護りながら、人の爲めに髮を結んで其日を送るなんて、宛然昔の小說にでもありさうな境遇だと、夫人の心根を思ひやつて、口へは出しませんが、獨り心の内に泣いていると、夫人も私に氣の毒な感じを起させまいと思つてか、急に例の洒脫な調子で「保子さん、職業だと思ふと眞に面白ひのよ、亂れてゐる人の髮を新らしく結ひ上げて瀟洒した其姿を眺めると、結つている私の胸までが淸々しますよ。」

ホームの發行

刀根螢水氏主幹の下に發刊さる『ホーム、ジョーナル』『ホームコンパニオン』『ウオールド、ヒズワイフ』等の粹を抜き長所を集めて編輯されたりと云へば見事なる事なるべし。一號發刊は五月一日なり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子の解放

田岡嶺雲

五。男性は女性に媚ぶべき也（承前）

自然界に於ける兩性の狀夫れ此くの如きに、獨り人間に於てのみ男主女從の現象を呈し、粉黛靚裝以て媚ぶる者は男子に非ずして女子なるの顚倒を見るは何ぞ蓋し男女共棲の家族なるものを形成して後、其家に於ける經濟的關係は本來生殖的本位の關係を變じて一種の權力關係となし、終に女子をして男子に媚びざれば活くる能はざる不自然なる除外例を生物界に開くに至りたるもの也。故に人に於ても其男主女從の關係を生するに至たるには、人間が所謂文明の狀態に達し、人爲の僞制を以て自然の素純を破壞したる以後の事に屬し其原始的自然の狀態に在りては人類に於ても亦他の生物と同じく女主男從の關係にありたるものなりとす

六。女系繼承は自然也當然也

夫れ女主男從は生物界の通義也、而して人類亦一個の生物にして、同じく兩性の抱合によりて生殖を遂ぐ

る者たる以上、獨り此通義に悖戾すべきに非ず、固より人は叡智を有す、然れども是れ單に腦量の差のみ、其生物たる所以に於て鷄犬牛馬羊と何の擇ぶ所ぞ、固より人は、二手二足圓顱方趾なり然れども是れ外貌の差のみ、亦其生物たる所以に於て四足を有して匍ひ、羽翼を有して翔るものと何の異なる所ぞ、人と雖ども亦應さに生物界の通義に順ひ、女主男從の關係に立たざる可からざる也、蓋し獨り人に於てのみ男主女從の現象を見るものは、人が其智巧を以て其本來の狀態を破壞し、標準を自然に求むることを忘れて、男女の關係を生殖本位以外の條件に據りて定むるに至りたるが爲めにして社會が所謂文明の塗抹を經ざる自然の狀態に在りては、人に於ても亦其男女の關係は生殖本位によりて定められたる女主男從の地位を有せしことは、之を人類學上研究の結果に照して殆んど疑ふ可からず

蓋し吾人が誇りとする所謂文明なる者は、一方よりいへば自然の征服なると共に、一方よりいへば自然の破壞也。人僞を以て人工を以て、即ち人爲の制を以て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自然なる無垢なる原始的素樸を破壊し、此に代ふるに不自然なる矯飾矯僞を以てする者也。故に文明の社會に於ては、人は自然を捨てば、不自然なる拘束の下に立つを免れず、故に眞に人間の自然の狀態の如何なるやを知らんと欲せば、吾人は須らく先づ電氣燈と自動車と、シルクハツト、燕尾服の今の時代を去つて、風俗習慣未だ今日の如き體制を成さゞる、原始的人種の上に現れざる可からず、蓋し何等の掩飾矯僞なき自然の眞は、獨り此原始的狀態に於てのみ始めて之を觀るを得可ければ也。

太古は邈焉たり、固より詳かにす可からずと雖ども而れども古代制度の今に攷ふべきものを究め、之を現在せる未開人種の習俗に徵すれば、其原始的狀態の髣髴を察し得られざるに非ず、信ずべき學者の研究に據るに其原始的社會に於ては、今日の如き男子を家長とする家族（Pater familias）の成立有るなく　從つて女系の繼承、（寧ろ女主の族）を普通とせるが如し。（ウヘスターマルク氏の如き異論者なきにあらざれど

も）我邦に於て天照大神が女性にして、高天原種族の主長たるの地位にありしことは姑くいはず、支那に於て家族の標號たるべき姓の字の作成が、女扁を有するは漢人種に於ても亦女系繼承の事實ありしを證すべく舊約全書（創世紀三十一四十三）に、レバンがヤコブに「此の娘等は皆我の娘なり此の子等は皆我の子なり」と云るは家長制度を以て著明なる希伯利すら其古に女系繼承ありしを察すべく又ヘロドタス、ガルシアン人に關して「試に其何人なるかを問へ、彼は其自らの名を擧げ其母の名と、女子の系統を擧て答へん」と誌したる希臘の古代にも亦此事ありしの證とすべし

更に未開民族に關して學者の報告する所を見るに何れも女系繼承の現に行はれ、或は其痕跡を存する事の事實を記すこと、殆んど一揆に出づ、リツペルト氏は亞弗利加に於て女系繼承の殆ど通則なるをいひ、ラツチエル氏はマレー群島の風俗を記して、其血族關係は妻を本として論ずと說き、モルガン氏は亞米利加印度人に於ても、女系繼承を普通とするを說けり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

蓋男女が未だ今日の如く夫婦なる人爲的結合に抑制せられず、從つて未だ今日の如き家族なる桎梏に繫縛せられざる時に方りて、直接に生殖の任務を負へる女子は親しく、兒子姙娠分娩乳養に當るが故に、母子の間には離る可からざる又疑ふ可からざる血脈の連續と愛情の相通とを有すと雖ども、生殖關係にワキ師たるに止まる男子は、單に本能的衝動により、其性慾を遂げて、無意識の裡に女子の生殖的任務を幇助する以外、其兒子との間に確たる繫緣あるを認め得可からざるや勿論にして、男子は其兒子に對しては殆ど路傍の人たらざる能はず、故に其子は母の子にして父の子に非ず、父は系統上に於ける局外者也。實にヘンリーメーン氏が謂へる如く、母系は直覺の事實なれども父系は推理の事實なるが故に原始時代に於て血脈が男系を以て論ぜられずして女系を以て論ぜらるゝは當然也

此女系繼承は男女の關係が純ら生殖本位の上に立ち未だ何等の權力的關係をも經濟的關係をも雜ざる時に際りては當然なる且自然なる現象なりとす、而して

女系繼承は即ち女主男從の關係を最も具體的に、實現せる者にして、既に女子が其姓の代表者たる以上、女子は其族を離れ去ること能はず、故に男子若し匹偶を求めんと欲せば、男子自ら去つて女子の許に歸がざる可からず、歸いで女子の族中の人たらざる可からず、而かも其諾否の權は實に女子の掌裡にあるが故に男子は其一諾を得んが爲めには、女子の爲めに勞に服し役を執り以て其材を示し其忱を表し、其歡心を買はざる可からず、幸ひにして女子家族中の人となり得たりとするもの既に女子は族の家長たるの地位に立つが故に、男子は其下に在りて雇僕として食物を獵り、傭兵として外敵を禦ぐの任に服するあるのみ。

支那に於る結婚は禮に於て、夫が先づ妻の家に往いて親迎するが如き亦此遺風としてみるべく、又妻を娶るに納幣を以てする所謂結納の如きも、之を男子の勢力が既に女子を壓したる後に行はれたる賣買結婚（購妻）の名殘として見んよりも、寧ろ曾て男子が求婚に際し女子に捧げし勞役の形式を變じて傳はりたるものといふを妥當なりとすべし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

吾等の見たる 柴田環女史離婚問題

守田有秋

陸軍々醫正藤井氏が其の夫人たる柴田環女史（東京音樂學校助教授）を合意の上離婚するに至つたと云ふ一事が端なく新聞紙上に表はれると、世間の敎育家は一大事でも出來したかの樣にして騷ぎ立てた。而し彼等は皆言ひ合せたやうに（深い離婚の原因を確めもせずに）「夫唱婦和」「賢母良妻主義」など云ふ道德觀念を以て環女史を律しやうとした。唯だ斯る陳腐なる世論の審判の中に、與謝野晶子女史が「二六」の時代文藝欄に於て、環女史のために、四日間に亘る大辯論を試みられた事は、近事婦人界、稀に見る壯觀と云はねばならぬ。

吾等の見地よりすれば、此の離婚問題は、別に大した事とも思はれぬ、日本の婦人が各自其の地位と境遇を自覺すれば、當然來る可き結果かと思ふ。然し、私は日本の婦人が斯くの如くして、一人一人自覺の地位に

到達しつゝある事を見て、頗る喜びに堪ぬのである。元來此の結婚たるや、藤井君の方から惚れ込で出來た結婚で、環女史が未だ音樂學校在學中から既に婚約は出來て居たと云ふ事だ。無論藤井君に音樂が解かる譯もなければ、天才の情熱の知れる道理もないが、藤井君は、唯だ環さんが、奇麗だ、可愛らしいと云ふので娶つたので、他に何の考への有つた譯ではあるまい。唯だ其れだけの事で貰はれたのだから、藤井君に取つて環さんは、唯だ人形に過ぎなかつた。「妻」と名を附した玩弄物たるに過なかつた。從つて環さんの方には隨分厭な事もあつたらうし、辛い事もあつたらう。然れども、現今の一般の女子は自ら經濟上の獨立と云ふ物を持て居ないから、大抵の事は、例の「夫唱婦和」で濟んで了ふけれども、環さんの樣な專門的技能を有して居る婦人は、何うしても、家庭奴隸の地位に甘んじて居る事が出來ぬ。第一何が爲に、良人の壓迫、專制に從はねばならぬか、馬鹿馬鹿しいでは無いかと云ふ觀念が、最も痛切に環さんの心を動搖さした事であら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うと思ふ。其處へ持て來て、良人は自分を任地へ連て行うとする、環さんは天職として居る音樂を棄て、職業を棄てねばならぬ。唯だ殘る處は「家庭に囚はれる」と云ふ一事より外にない。然し其を不快と知りつゝ、「自分の運命は是だ」と思つて、我慢を仕て居ては、環さんの心が滿足せぬ。是此の問題が、無解決を標榜せる自然派文士の題材にならずして、却つて、イプセンの問題劇とならんとした所以である。

環さんの胸には、激しい反抗の熱が嵩つた。其の美はしき頰を、紅に染める許り、男性に對するレボルトの念が燃えた。彼女は、其の地位と、周圍の事情に打ち勝つて、其の一念を斷行せんとした。斯くして初めて正式に良人に對して離婚を請求した。此の離婚請求は藤井君に取ては、攻城砲を向られたよりも手痛つた事であらうと思ふ。脆くも城は落た、勝利は環さんの手に歸した。而して環さんは哀れな奴隸的の地位から解放されたのである。

其れは一面から見れば、藤井君も氣の毒には相違ない

が、然し、是は獨り藤井君許りでない、婦人の個性を認めずして、妻を所有物の樣に思つて居る世界の男性が、一度、「女性の自覺」と云ふ大災難に逢着仕たならば、誰彼の容赦なく、ズドンと一發食ねばならぬ問題だ。何よりもイプセンのノラが好い證據だ。其は藤井君も環さんに惚る位だから、隨分環さんを愛して進たのは相違ないだらうが、然し其の愛たるや愛さんが爲に愛ではなくして、多分愛するのが、面白いと云ふのであつたらう。であるから智慧の果を食たイブは、何時か眼を開かされて、周圍の關係と事情が明かに成れば、最う良人の人形と成て居る必要はない。左甚五郎の人形では無いが、自然と精が入つて、自分と云ふものを自覺した環さんは、箱の中から踊り出した。是を見て吃驚した者は、人形の持主許りではあるまい、周圍に居る教育家や、新聞記者や、倫理學者や、聖書の作者や、神の製造者など、有ゆる群盲は、一齊に起て騷いたらう。而して、彼等の規則や、律法に反せる生人形を取り押へんとしたが、最う駄目であつた。時代

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は最う一轉して居た。奇蹟は白日晴天の下に公然遂行されて了たのである。

。　。　。　。　。　。

斯く記し來れば、或人は頗る偏した説の樣に云ふであらうが、元來『人の妻』になるのも、能く考へて見れば一つの職業を得るやうなもので、人の妻に成ば必ず婦人の生活は安固である、又妻の生活を安固になし得る人でなければ、妻君を娶りもせず、嫁きも爲ないが其れだけの保障を受けて居るだけに妻は權利の總てを良人に奪はれて居る。其れでも、彼女は生活の不安を恐れるが故に有ゆる屈辱を堪え忍ぶのである。是が藝妓女郎になると、一人の男子から生活の保障を受けるの必要がないから、頗る無責任になる。彼等に『操を守る』と云ふ事のないのは其處の譯である。然るに前云ふ如く環さんは職業を持つて居る。即ち經濟上の獨立を有して居る。彼れは舊い道德を守つて、嫁いだ家を死場所とする必要も無ければ、藤井君の傍に附いて

居る必要もない。離婚問題は、環さんの自己覺醒と同時に必然の結果として起つたのである。

以上の意味に於て吾等は、環女史の離婚を寧ろ女性の自己解放として賀す可きだと思ふ。

小供

山田旭南

子供といふ者は時々突飛な思もつかぬ事をする者だ。僕の處に五つになる小供がある、つい此頃近處の湯屋に連れて行つて先づ先へ出しておいて後から上つて行くと其子供の姿が如何しても見えない、よもや一人で外へ出る筈はないと思つたが其でも心配になるので番臺の人に聞いて見ると只今代つたばかりで存じませんとの話、丁度其時は日中で外に入湯の客もないから聞いて見る事も出來ない、仕方がないので知らんといふては濟むまいと番臺の者に喰てかゝると、何處かで『お父さん』といふ聲が聞える、はてなと思つて振返へるとのこ／＼と衣物を入れてある箱から這出して來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▲小説月評　　有秋生

▲スバル(四月號)　前號に『半日』を出した鷗外博士は、本號に脚本『假面』を公にして居る

杉村文學博士に痰の檢鏡を頼んで置いた文科大學生山口栞は、今年大學を本業せねばならぬから、學校は何うしても休み度くな　と言つて、博士と問答を仕て居る。其處へ病院に仕事を仕に來て怪我をした植木屋佐吉を擔架に載せて來る、佐吉は治療の甲斐もなく死んで了ふ、此の間博士の書齋に待て居た山口は博士の手帳に、自分の咯痰檢鏡の結果が、ホヅチイプと書いてあつたのを見て絶望して、辭し去らんさする。博士は其は止めて、自分も以前肺病患者であつたが、今は直つたと言つて自分の結核黴菌を顯微鏡にかけて示し、諄々として山口を説く、●遂に山口も説得されて了ふ。(以上梗槪)

一寸通讀したのみでも有り振れたレーゼ、ドラマとは餘程趣を異にして居るやうだ。上場しても面白からうと思はれるし、周圍の調和が能く取れてあるし、性格も明瞭に出て居るし、一寸イプセン張りで、極端な個人主義の思想が見えて居るけれども、其處が、此のドラマの骨である。

作者は東西の此の道にかけて熱した人だけに白の間に最も緻密な下書を仕た事などは、此のドラマの注意すべき點であらうと思ふ、幕切れの處が、少し態とらしく思はれたが、然しあれも思ひ付きであらう。

▲新小説(四月號)　小劍君の『月夜』を讀んだ私は此の作者の作物は能く讀んで居るが、兎に角『灰燼』などから比較して見ると此の作ば餘程長足の進歩で作中に表はれた人々の性格美しい奈良のローカル、カラーなど、大變に能く出て居る。殊に土地が土地だけに會話も上方の方言を用ゐたのは全體との調和が取れて、頗る好い。取り立て、何處が好いと指摘する事は出來ぬが、引くるめて見て全體が好い。伯父さんの性格、從兄の人　其の妻なる人、白痴の娘、雪枝さん、一人　人に特色を見せた處は、確に手腕だ。

▲鬼(薄田泣菫氏)　本篇は『落葉』に出て居る頌文めいた散文よりは、大分進歩した風が見える單純な幼年時代のスケッチに過ぎぬが、然し何となく人を魅着せしむるやうな筆力を以て居るのは、矢張り唯だの作者ではない。唯だ詩人だけに時々殊更なる技巧を弄したやうに思はれる叙景のあるのは致方がない。

▲新潮(四月號)　『失踪者』(眞山青果氏)何の彼んのと、言つた處で、矢張りグッと頭角を拔いて居るのは此の作家だ●例の如く性格の描出に於ては、一流の作者たるが如き落着いた態度を以て主人公常次の性格を能く表はして居る。

一寸花袋氏の『重右衛門』の性格に似通つた處もあるやうだが、あれ程偏した、極端に不具になつて居るやうにもない。一面に頗る個人的な處はあるけれども、然し亦同情もあり涙もある半面の性格が、茂與さんと對照されて能く出て居る。

周圍の叙景と、叙情が相調和して、毫も無理を仕た處がない。無理のない處は卽ち此の作の傑れた處だ。

▲校正室(相馬御風氏)前者程感興は惹かぬが能く書きこなされてはある。けれども私は斯んな物には最少し同情を以て、自分を中に入れて書いたら何うだらうかと思ふ。兎に角私にはバタを着けずにパンを食ふやうな心地がした。

▲凩(草野柴二氏)　何うも殊更に小説に仕やうとしたらしい處がある。篇中の妻君だけは稍々首肯れたが、肝腎の主人公が一向出てない、何よりもかによりも殊更らしいのたが第一缺點だ、私は、もつと、もつと、平凡に書いて貰ひ度かつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▲編輯たより

有秋生

▲本誌續刊以來、各方面より御助力を與へられし事は吾等の感謝に堪えざる處に御座候、殊に刀根壺水君、若宮卯之助君の如きは小生に對し各種の忠言を忝ふせられ深く感銘致居候。

▲本誌經營に關し、從來の讀者諸君の中兎角の御疑問も候はんかと存じ、一寸御披露申上候。實は、本誌續刊の計畫あるや、經營者堀保子君に對し、二三知友より相當の御援助あるやに承りしも、其の運びに至らざる以前突然六卷第一號を發刊致す事に相成りしため、今日迄の處にては資金は總て保子君の財布より出で居り、毫も他の御助力を願ひ居らざる始末に候へば左樣御承知置き願上候。斯る次第なれば、恐らく今後も經營の程隨分困難とは存じ候へども、廢刊休刊等の醜態は、斷じて演せざる積りに候へば、是れだけは御安心の程願上候。

▲前回もお詫び致せし如く、從來前金拂込の諸君に對して、其義務を果す能はざるは、一同の遺憾に存する次第に候へども、さりとて從來の經營者が諸君に殘存せし義務を現經營者に於て履行せん事は、非常なる困難に候へば、唯だ讀者諸君の御宥恕を願ふの外は無之候。

改正定價

一部	金拾錢
六ケ月前金	五十五錢
一ケ年前金	一圓
（何れも郵税共）	

廣告料

特別一頁	廿五圓
普通一頁	拾五圓

▲本誌は毎月一回（一日）發行とす。

▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵劵代用ならば五厘切手で一割増に願ひます。

▲御注文の時は必ず何卷何號より何號まで何册の前金と明瞭に御記載を願ひます。

▲御手紙には必ず住所姓名をハッキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。

▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切た時には帶封に『前金切』と朱印を捺して上げますから御注意下さい。

▲歐米各國よりの御注文は別に一册に付二錢づゝの郵税を申受けます。

明治四十二年四月廿七日印刷
明治四十二年五月　一日發行

東京市本所區緑町三丁目八番地
發行兼編輯人　中原孝吉
東京市神田區豊島町卅九番地
印刷者　金山佐治

東京府下大久保仲百人町二百十二番地
發行所　家庭雜誌社

大賣捌所　上田屋　東海堂　東京堂

東京市日本橋區下槇町

如山堂書店新刊廣告

振替口座東京六四三五番

内藤鳴雪選
其角堂機一選
第一 萬朝俳句選
正價三十五錢 郵税六錢

内藤鳴雪選
其角堂機一選
第二 萬朝俳句選
正價三十五錢 郵税六錢

白柳秀湖著
竹久夢二
三上知治 畫

黄昏

美術的挿畫二葉
菊版三百頁頗美裝
全一冊金八十五錢
郵税金八錢

或者は豫言者の如く起ちて時は黎明に近しと叫べり或者は惆悵として世は黄昏也と云へり只見る一道の薄光微かに時代の地平線を彩るのみ、暗淡たり、濛瀧たり。見よ本書は明治四十年に於ける一大社會史なり

吉江孤雁著
小杉未醒畫

緑雲

最新美裝全一冊
價金七十錢
郵税八錢

著者自然描寫に於て本邦文壇露のツルゲネフに迫ると稱せらる。本篇は詩趣横溢せる著者得意の散文集にして新藝術の最も清なるものなり

天囿主人著
新藤栗毛
價金四十錢 郵税六錢

宮崎湖處子著
半生の懺悔
價金四十五錢 郵税六錢

山水美論

小島烏水君著 木下藤次郎畫

全一冊 正價金七十錢 郵税金八錢

大好評再版發行

田山花袋君著
名取春川氏畫
村の人
價金七十錢 郵税八錢

篠原嶺葉君著
野田九浦君畫
田鶴子
價金九十錢 郵税八錢

岡田八千代著
門の草
價金五十錢 郵税六錢

與謝野晶子著
舞姬
價金七十錢 郵税八錢

ドクトル　有田九皐先生著

自然と健康

上製定價一圓二十錢
並製　　　九十錢
郵税不要

健康は自然にして疾病は不自然なり、今や人文進歩域に達すと雖も然も醫事衛生の迷信誤解は未だ到る所に盛に行はる、近時萬病各地に増加する故なきにあらず恁かる誤謬偏見が啻に罪惡と貧窮との原因なる而巳ならず、遂に不自然なる死を招くに到るべし、簡單なる二三の『自然』の法則を守らしむる而巳にても年々優に數千の同胞を救助し得るに難からず、加之人は複雜なる社會的生存に於て意外の災禍に遭遇し或は種々なる不衞生的境涯に立たざる可らざる事稀ならず殊に一家管理者に醫學的衞生的智識を有すべき事の緊要なる論を俟たず若し斯かる場合に於て適當なる智能を有し直に合理的處置を施す時は唯に混雜費苦痛等の分量を輕減する而已にあらざるなり是著者が殊に家族的療病法を附して良醫の監督技術を受くるの道なき不幸の患者に對して大に扶益する所あらしめんとする所以也

東京市神田區西紅梅町十二番地
發兌元　中庸堂書店
振替貯金口座東京六三三〇番

懐中要藥

登録商標　高木

東京市日本橋區元大坂町八番地
本舗　高木與兵衛

東京新橋
電話一一〇二

診察 午前九時
〃正午迄
毎日午後三時より

加藤病院

獨國醫學士 加藤時次郎

神奈川分院

外科皮膚病梅毒痳痔

卅九年來再び歐洲に赴き更に左の科を専攻し今般歸朝
診療に從事す

内臟外科（肺、胃、肝、腸等）
婦人科（産科を除く）
泌尿生殖器（特に腎臟膀胱等）
X光線（內臟診斷 皮膚治療）（落成 診療開始）

齒科治療 自午前八時 至午後十時

吉瀬齒科醫院

院主 吉瀬才市郎

東京市神田須田町二十六番地
（萬世橋內右横町）

●藥價手術料共半額
●貧困者施療

東京實用女學校

東京麹町區飯田町四丁目

本科 三ヶ年
裁縫科 二ヶ年

手藝科速成 募集

實習科は實習の取入にて學資を支辨す苦學生は來れ高等女學校の迂遠なると技藝女學校の技藝に偏して品性の陶冶に疎なるを憂へて實用の教育をなすは本校唯一

校外生科 生徒募集

本科三ヶ年の課程を通信教授にて自宅獨習し一年半に卒業せしむ女學校の校外生は我國唯一あるのみ、ありふれたる講義録と異なる實用教育の味を知れ
實用主義の教育を校內校外に施して我國の女學教育を一新せんとする理想より湧き出づる教育を味へよ
規則は切手二錢前送

總長 公爵夫人 一條治子

◎眼科診察 毎日午前◎

京橋南佐柄木町五

川上眼科院

（電話新三四五八）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

梅毒 痔疾

麻病 肛門

橫根 下疳 睾丸 皮破 陰萎 早漏 痔核 脱肛 痔瘻 凡て 新藥 應用

無痛新療速治

本院は多年の實驗と最も斬新なる理學的無痛注射手術療法とにより如何なる慢性の難症も誓て速治せしむ

專門　醫學士擔任診療す

診察時間＝午前八時より午後九時迄

神田區須田町廿一（萬世橋際）

樂天堂醫院

●入院隨時●診察無料

淋梅毒科
婦人科
肛門外科

各凡て新式療法及本院獨特專門の水電温氣療法マツサーゼ手術並エレクトリツクバス無痛嶄新療法を加施し根治的最新切に治療

兩國橋河畔電車通り（日本橋區矢の倉町十三河岸）

博生醫院

院長　醫學士　北畠孝夫

●診察無料（入院隨時）　診察毎日　自午前八時至夜間九時

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

産科
婦人科 天本醫院

下谷區仲御徒町二丁目卅五番地

△入院隨時（故丸茂文良氏邸跡）

院長 醫學士 天本治

電話下谷二六六九番

……△病室增築落成▽……

●美眼術 斜視（やぶにらみ）

●ひとゑまぶた●くぼみめをなをす

●をふたゑにす●めじりをあげる

院長山尾ドクトルの發明する處無痛一回施術にて治する最新科學的眼形改造術也

●他眼科醫にて治し難き慢性眼病者は來れ診斷豫后を明答誓て速治せしむ

●トラホームは最近歐米專門家の稱用せるベクトル氏發明の光線療法にて根治す

診察無料 淺草橋際 山尾眼療院

セーフォイル商會小林技師長最新發明

時期來れり見落すなかれ

簡易即席 サイダー ラムネ ジンジヤ 製造法

ラムネ飲料の時代は去れり今や最新好飲料としては(シャビンサイダー)の全盛時なり故に是れが秘法を開放し廣く天下に頒たんとす本法によれば婦女子と雖も容易に製造し得る樣(材料は普通サイダ十二錢の代を買へば五本分を製造し得地方至る處の茶店にあり)詳細を極め平易に懇切に説明しあり特に二千名を限り極優美なる製造器壹個を添ふ此器は日常水差に使用し得體裁甚だ佳なり

代價金八十五錢送料荷造金五拾錢　海外送費二十二錢增代金引替三十錢前送のこと

東京市神田區三崎町三ノ一

實業タイムス社

(電話長本局四三六番　振替口座一七六〇三)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

汽機、汽鑵　耐震煙突

宮原水管式汽鑵　喞筒、起重機

東京市芝區金杉新濱町一番地（電信略號シバウラ）

株式會社

芝浦製作所

電話新橋（五三番、特長三五〇番、二二八一番、三二三三番）

發電機、電動機　電鐵電燈用具

岸式發電機、電動機　變壓器諸種

美術造花材料
發賣御案內
最新式染料
拾貳種及拾八種
使用法說明書添附
天野卯兵衛商店
東京市日本橋區横山町十六番地
電話浪花一六四三
振替口座四九七〇
見本…郵劵四錢封入御申込